

《論文》

大学におけるキャリア教育の現状と 課題についての一考察

—キリスト教教育との関連性に着目して—

藤井 満里子

はじめに

日本の大学におけるキャリア教育をめぐっては国の後押しもあり、インターンシップをはじめ、様々な取り組みが行われている。一方で、学生の側からの課題を見ると、就職に関する意識の低下、学ぶ意欲そのものの低下、自分の意見や思いを表現する力の低下などの指摘がなされている。

筆者はキリスト教に基づく教育を建学の精神とするミッション系大学においてサービス・ラーニングに携わりながらキャリア教育について考えているが、キャリア教育を行ううえでは、とりわけキリスト教教育のなかにある他者へのまなざしや、社会的使命といった部分には、大きな可能性と憧憬を感じる場所である。しかし、日本におけるキャリア教育自体の歴史が浅いためか、キャリア教育とキリスト教教育の関係について着目した研究は、才藤（2007）などがあるが、相対的には今もって少ないのが現状である。

本論においては、キャリア教育をキリスト教教育との関連性のなかから見つめ直そうというのが狙いである。これから述べるキャリア教育とキリスト教教育の関係については、あくまでも試論としての一考察である。まずは日本におけるキャリア教育の現状と課題を紐解くところから始めたい。

I. キャリア教育の現状と課題

1. 日本の大学におけるキャリア教育の経緯

わが国において初めて「キャリア教育」という言葉が登場し、その必要性が明記されたのは、1999年の中央教育審議会答申においてである。そのなかでは、「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と定義されている。2004年には文部科学省の『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』で「児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てるために」と題して、キャリアは「個人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関連付けや価値付けの累積」との定義がなされ、進路指導の中核としてキャリア教育の推進が提言された。これをもって、2004年が「キャリア教育元年」と呼ばれている。

その後、2008年には大学における学士課程教育においても、キャリア教育を、生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指すものとして、教育課程のなかに適切に位置付けることが明言され、続いて2011年には、大学設置基準法の改正が行われ、大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとするとして、大学でのキャリア教育の義務化が明記された。さらに2013年には、教育再生実行会議による第三次提言が出され、個人の能力を最大限引き出し、一人一人が国家社会の形成者として社会に貢献し責任を果たしながら自己実現を図り、より良い人生を生きられる手立てを提供するという教育の機能を十分に果たせるようにするための改革が行われた。こうした流れもあり、各大学の教育現場においてはキャリア教育が本格的に始動されるに至った。

2. キャリア教育の定義

文部科学省によると「キャリア教育」とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義され、「特定の活動や指導方法に限定されるものではなく、様々な教育活動を通して実践されるものであり、一人一人の発達や社会人・職業人としての自立を促す視点から、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものである」(2011)とされる。

そもそもキャリア教育の起源は、1970年代のアメリカにおける「キャリア教育運動」であり、当時の第19代連邦教育局長官であり、キャリア教育の父とも呼ばれるシドニー・P・マーランド(Sydney P. Marland, Jr)が米国の公教育改革のなかでキャリア・エデュケーション(Career Education、キャリア教育)を提唱したことに始まったと言われている。江利川(2017, p.238)によれば、マーランドは「すべての教育はキャリア教育であるべきである」と述べているが、その背景にあるのは、「教育者のすべての努力が学校卒業直後に有益、完全な仕事に従事する学生や、進学する学生のための適切な教育に向けられるべきで、ある特定の仕事や訓練についてではなく、生涯を通して進歩向上しようとする人々の能力をいかに高めるかということなのである」とされる。

筆者も大学でキャリア教育に携わる身として、マーランドの言う「すべての教育はキャリア教育であるべきである」という部分は、とりわけ重視するところである。その立場に立って考えると、大学において学ぶ意義とは、すなわち学生が一市民としてこの社会において自らの居場所を見つけ、他者と関わりながら自分なりの役割を果たしていけるように、また人生全般にわたってより良い人生を歩んでいくための方法を見つけることに他ならない。そのためにもどのような教育を行うべきなのか、日々試行錯誤を重ねるところである。では現在の日本の大学におけるキャリア教育の課題とは、一体どのようなものであろうか。

3. キャリア教育の課題

2015年に日本学生支援機構が実施した「大学等における学生支援の取組状況に関する調査」によれば、図1に示す通り、「大学等におけるキャリア教育・就職支援に関する課題」のなかでも、学生の能力や姿勢に起因するものとして、「学生の就職・就職活動に対する意欲・意識」(57%)、「学

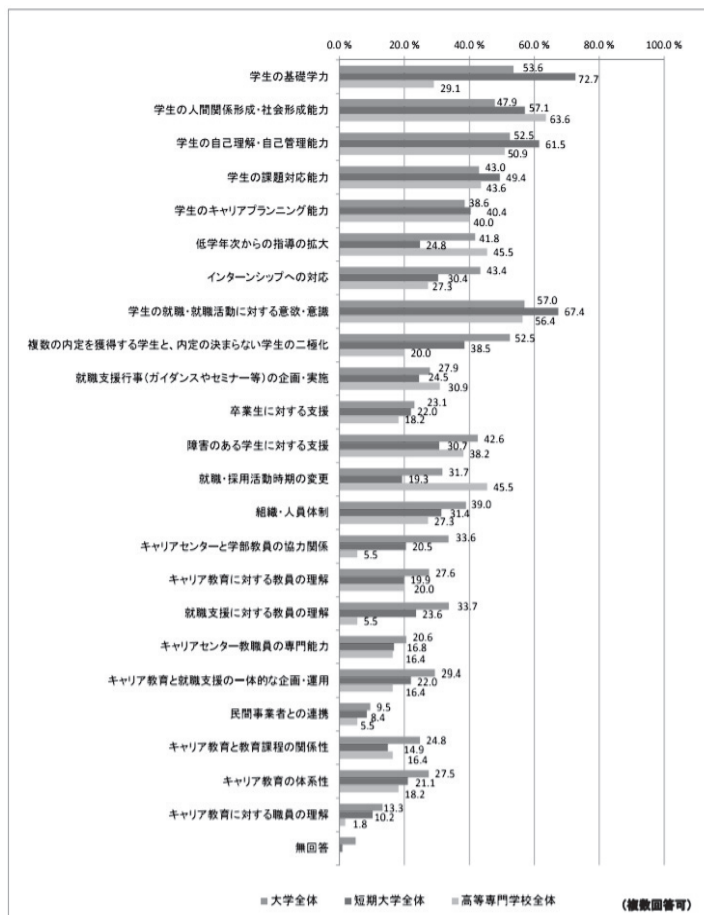


図1 キャリア教育・就職支援の課題(学校種別)

出典:「大学等における学生支援の取組状況に関する調査(平成27年度)」独立行政法人日本学生支援機構 2017年。

生の基礎学力」(53.6%)、「学生の自己理解・自己管理能力」(52.5%)、「学生の人間関係形成・社会形成能力」(47.9%)が課題であることが指摘されている。

また、2010年に Benesse 教育研究開発センターが行った「キャリア教育・就職支援の現状と課題に関する調査」によれば、全国の国公立私立

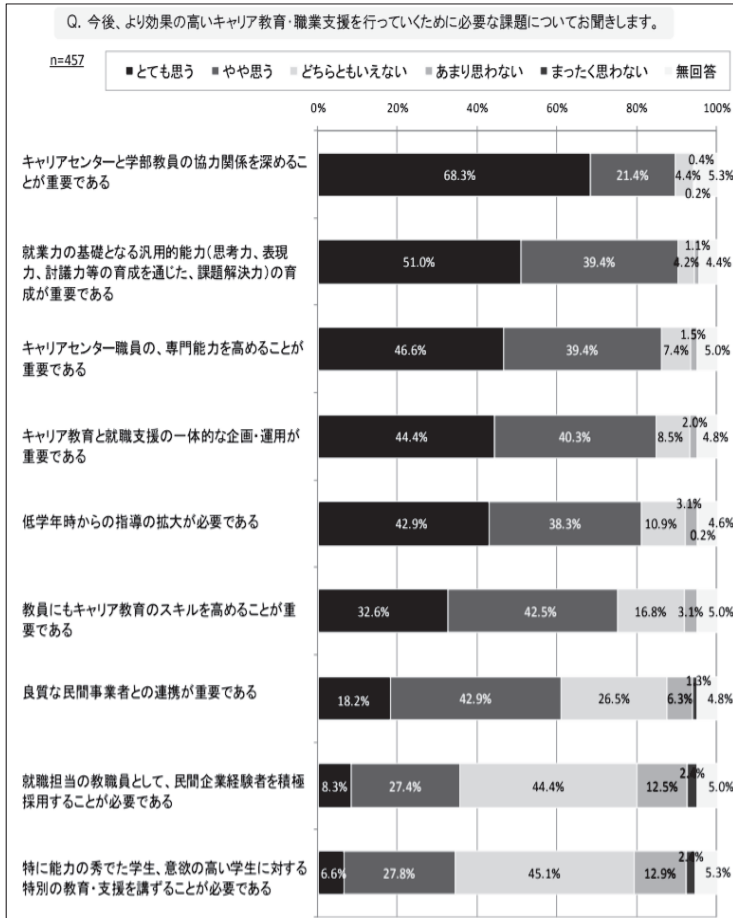


図2 キャリア教育・就職支援体制の課題（全体）

出典：「キャリア教育・就職支援の現状と課題に関する調査（2010年）」Benesse 教育研究開発センター 2010年。

4年制大学のキャリアセンター・就職部門等の現場では、キャリア教育・就職支援に関して必要な課題として、学生指導の面では「就業力の基礎となる汎用的能力（思考力、表現力、討議力等の育成を通じた課題解決力）の育成」、「低学年時からの指導の拡大」に課題があることが示されている（図2）。

同調査から大学のキャリア教育の現状と課題を概観する研究を行った堀（2016, p.32）によれば、「学生からの相談内容の上位は、自己分析（志望動機・自己PR）と採用試験（面接・筆記）に関わることであるが、一方で、学内のキャリアセンターや企業側からは、学生の「粘り強さ」、「チームワーク」、「主体性」、「コミュニケーション能力」の「社会人基礎力」や「基礎学力」が欠けている、すなわち、多様な人々とともに仕事を行っていくうえで必要な基礎的な能力や必要な文章力の不足、思考力や口頭での表現力が不足し、これらが不足しているために、キャリア教育として面接指導をすることも難しい」と指摘している。従って、「専門的な能力育成の前に、まず自己分析、基礎学力、自ら考え自分の意見をまとめる力、それを表現できる力、自分のライフプランを考える力等の育成が求められる。学生から社会人への移行プロセスとして主体的に、自律的に自らの職業選択をできない学生が多く、キャリアセンターによる職業や就職に関する情報提供や相談体制レベルでは、キャリア教育としては追いついていけないことがわかる」として、キャリア教育について全学的な検討が急務であることを指摘している。

さらに、山岡（2012, p.247）によると、先行研究からの課題として、最近の学生には「自分中心のキャリア観」が見られ、キャリア教育においては、人間性や内面重視という視座が必要となると指摘している。そのうえで、キャリア教育に「他者」、「自然」、「社会的共生」といった市民社会的思想が導入されている報告例はけっして多くないとも述べている。

筆者はキャリアカウンセラーとしても学生の相談に応じているが、上記の指摘のように、全体的な傾向として、学生の自己理解の不足や、多様な

人々と協調して何かを行っていく上で必要な基礎的なコミュニケーション能力、文章力・口頭での表現力、思考を掘り下げる力の不足は、実際のキャリアカウンセリング場面を通して課題と感じるところである。また、「自分中心のキャリア観」も散見されるところで、職業や進路の選択に際しては、「自分のやりたいこと」や「こうなりたい」という思いだけが先行し、社会全体への目配せや他者への想像力や共感力に欠ける学生も見受けられる。だからこそ、筆者がこれまで携わってきたインターンシップや現職のサービス・ラーニングのように、社会に出る前の段階で、学生自身が社会の現場にも身を置き、教室との往還のなかから実感を持って学ぶことの必要性を痛感するものでもある。

こうした現状に対して児美川（2007, p.80）は、「子どもと若者には、彼／彼女らが学校にいる段階から、厳しい社会的現実には漕ぎ出ていき、現実と格闘できるようになるための、“武器”を身に付けさせておく必要がある」と述べる。「子どもたち・若者たちは、彼／彼女らがおかれている日本社会の現実（とりわけ、若者の就労をめぐる状況）を対象化できなくてはならないし、実際に社会に出ていった際に“力”になる知識や技能や人間関係（を形成する力）を獲得している必要がある。また、自らの進路（キャリア）をしたたかに選択し、ときには選択し直すことのできる力量を身に付けておくことも必要だろう。子どもたち・若者たちのこうした力量形成を目的とした教育こそが、今日の学校に求められるキャリア教育の内実に他ならない」と述べ、つまりキャリア教育とは、「子どもたちの社会的自立や職業的自立の支援ということを念頭において、彼／彼女らに「生きる力」を身に付けさせることを目的とした教育課程の再編成の試みである」と提言している。

これまでに挙げた課題を整理すると、「就職・就職活動に対する意欲・意識」、「自己理解・自己管理能力」、「人間関係形成・社会形成能力」、「就業力の基礎となる汎用的能力（思考力、表現力、討議力等の育成を通じた課題解決力）の育成」、「粘り強さ」、「チームワーク」、「主体性」、「コミュ

ニケーション能力」、「多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力や文章力、思考力、口頭での表現力」と、重複もあるが、人格に関わる能力全般が不足していることが課題として浮かび上がる。

つまり、現状の大学におけるキャリア教育の課題と言えることは、基礎的な学力の他に、社会の実情を意識したうえで、対処法的なノウハウや、小手先のスキルに陥らない人間性や内面を重視した人格形成、「生きる力」につながる全人的な教育であり、そこでは「他者」、「自然」、「社会的共生」といった市民社会的思想への配慮も重要な要素となる。このようなキャリア教育をめぐる現状に対し、キリスト教教育との関連性のなかからキャリア教育を検討してみたい。

Ⅱ．キャリア教育とキリスト教教育の関連性について

1. キリスト教教育の定義

まず、キリスト教教育については様々な定義がなされるが、本論では現在のキャリア教育で課題となっている「生きる力」につながる議論として、坂口による、「生きることが同時に生かされていることを意味付けしていく教育であり、相互の交流を通しながら、生き甲斐をそれぞれに見出していくものである。それは絶対者に照らされた自由と平等の認識であり、その実践は日常生活のなかに触媒としてはたらき浸透していく」という定義を手掛かりとしたい（坂口, 1997, p.14）。

この定義を援用する理由としては、まずは坂口が、「戦後の民主主義の教育は、キリスト教精神に基づいた思想と、その担い手たちが実践的指導を展開したことによって、人間の自由と平等の意味を日常の生活の中で実現していく働きをしていった」ことを明らかにしつつ、それは「教育の日常化や社会化と呼ばれる触媒作用」であること述べていることにある。そしてその後の社会変化に対応して重視されるようになった「生涯教育」についても、「人間性の尊重・個性の伸長」が根本になっており、「戦後の教育基本法で提起した「人間の尊重」であり、民主主義の精神にかなった相

互学習法によってもたらされる」ことを重視していることにも起因する。つまり坂口は、現在の日本の民主主義を支える根本は、キリスト教精神に基づいた「人間の尊重」にあり、何よりも人が「生きる」根源的な意義に着目して定義づけを行っている点にある。

加えて、大学でキャリア教育に携わる筆者自身も、先に示した通り、大学において学ぶ意義を、「学生が一市民としてこの社会において自らの居場所を見つけ、他者と関わりながら自分なりの役割を果たしていけるように、また人生全般にわたってより良い人生を歩んでいくための方法を見つけること」を重視している。こうした理由から、社会のなかで「生きる」意義を模索しながら「生き甲斐」を見出そうとする坂口の定義は、本論を進める際の大きな手掛かりになると考える。これを元に5つのポイントから、キャリア教育との関連を考えてみたい。

2. 「ことば」から始まるキリスト教

『キリスト教大事典 改訂新版第8版』（1985）によれば、キリスト教における「言葉」とは、神の啓示を意味する。その説明には旧約聖書、新約聖書、また教理史や神学でも様々な解説や研究がなされるが、今回は「ヨハネによる福音書」をひとつの手掛かりとして論を進めたい。なお聖書の引用は、『新共同訳聖書』（1992）によるものである。「ヨハネによる福音書」は、その神の啓示を「言」（ことば）と呼び、「初めに言があった。言は神とともにあった。言は神であった」（1章1節）、「すべての事物はこの『言』によって成ったという」（3節）とは、非常に有名な一節である。キリスト教信仰においては、天地創造以来すべてのことは「言」の働きによって成立しているとされる。

日本基督教団神奈川教区巡回教師の関田寛雄は2015年に行った講演「み言葉をたずさえて歩む」のなかで、「み言葉」に出会うことの重要性を説いている。「聖書の言葉、『み言葉』というものは、出会うものであります。（略）『み言葉との出会い』それは『自分の聖句を持つ』ということです。

自分の人生を揺さぶってくれる、自分の命を揺さぶってくれる、そのような聖書の言葉、私にとっての聖句、これを持っているかどうか。その言葉によって自分の人生を語られるような、その『み言葉』を与えられるかどうか。もしそういう『み言葉』を既に与えられているという方は、何と幸せでございましょうか。その『み言葉』がその方の一生を規定しているからです。位置付けるからです。支えていくわけです」として、聖書を学ぶこと、また聖書のみならず、人間存在に触れる根源的な言葉として、自分を支える「言葉」を持つことの重要性を説いている。

一方、「言語力」を「生きる力」の主要因だと主張している藤澤（2011, p.217）によれば、通常「言語力」と言えば、語彙の豊富さや文法的表現の正しさ、正確なコミュニケーションといったことを意味するが、「言語力」とは、言語を適切に使う力のことであり、その範囲は幅広いことを説いている。例えば人間関係を構築して協力体制を築き上げることや、宣伝に踊らされないようにすること、偏見や差別をなくすことなど様々な場面にも及ぶと主張し、その理由を、言語力を「生きる力」の主要因と考えているためだと説明する。そのうえで、「生きる力」としての言語力を強化するためには、学校教育において「外在的思考」ができる人を積極的に増やすことが重要と主張する。藤澤による「外在的思考」とは、「抽象的に表現されているものを具体的に考えること」と説明し、例えば、飢えている人を助けたい時には、飢餓の本質について抽象的な議論をするよりも、実際に食べ物を与えるための具体的な解決策を考えることだという。そしてそのような「外在的思考」を強化する手段として必要なのが、「科学的リテラシーの育成」と「読書」であると主張する。「科学的リテラシー」は、曖昧さを排除した用語や概念の正確な理解、単なる思い込みや偏見を排除するための仮説演繹的な考え方、客観性や妥当性・信頼性を伴うデータの見方といった力を育成することを重視している。また、日々起こる様々な経験から個人が何を学び取り、自分のなかにどう位置付けていけるのかの基礎は、個々の学術的知識や文学的作品からの刺激によって、その人がど

れだけ「開眼」されているかによらず、そのために最も効率の良い方法が「読書」であると主張する。

これらは心理学的な見解を含むものであるが、「言語」と「生きる力」の関係性、現在の教育全体における「言葉」の持つ本来的な使命と可能性を端的に示しているものであり、キャリア教育とキリスト教教育の関連性を示す本論においても重要な指摘と筆者は捉えている。

すなわち「言葉」は単なるコミュニケーションを司るツールなどではなく、全ての物事の始まりは「言葉」であり、その「言葉」のなかに個々の人生が規定され、位置付けられている。そして人がその根源的な「言葉」を支えとして人生を生きようとした時、それらは抽象的で曖昧な概念であっては意味をなさない。また日々生じる出来事や経験を自己のなかに意味のあるものとして取り込んでいけるかどうかの基盤をなすものもまた「言葉」なのである。そうした根源的な意味も含めて、「言葉」を大事に適切に使うことのできる人材を育成することこそが、現代の社会のなかで「生きる」意義を模索しながら「生き甲斐」を見出そうとするうえで重要なことなのではないだろうか。藤澤の言うように、「生きる力」としての言語力の一般的な強化策として、科学的リテラシーの育成や読書も重要であるが、「言葉」から始まり、あらゆる事柄を言語化しようとしてきた宗教であるキリスト教の教育には、まずもってそこに大きな役割があると筆者は考える。

3. 教会における他者の言語刺激と意味の発見・強化

キリスト教教育について、先の坂口（1997, p.1）は、「日常生活の中で『対話』を通して、人間の生き方を問いかけ合い、存在の意味を共に求めている共教育であり、対話を通して悩みを分かち合い、語り、祈り、そして生きる力の共感を得ながら、自己教育をすすめることである。そこには人間の自由と平等、人間性の尊厳を主張するとともに、人間性の限界を絶対者によって知らされる機会ともなる」と述べている。

このことは、キリスト教教育においては、神からの啓示としての言葉を語り、人間が生きるというその意味を見出していく作業が「対話」というかたちで連続して行われることを示している。それは他者からの言語的な刺激が、与えられた人間の思考に直接働きかけ、その人物のなかでその言葉が反芻されることによって「意味」が発見され、やがては強化されていくことにつながるものとも言える。この「意味の発見」に関しては、人は意味を見出した内容の習得はしやすいが、意味を見出すことのできない作業には意欲的に取り組むことも、内容の習得も困難である、とする研究成果は心理学や学習心理学の分野では数多くみられるものであるが、キャリア教育を考えるうえでも、人が生きるための意味を発見していくプロセスもまた、重要な要素となるであろうと筆者は考える。

人格の形成途上にある学生がこうした言語的刺激を受け続けることの重要性は、とりまなおさずそれは学ぶことや自らの人生について考え、その意味を発見し、揺るぎない自己を確立し強化していくことに他ならない。そのためには、独りで考える「沈思黙考」という行為も欠かせない。先のキャリア教育の課題のひとつに「低学年時からの指導の拡大」という点が挙げられるのも、それはこうした言語的刺激と反芻作用が早くから起こることのメリットを鑑みたものであり、例えば公務員になりたい学生に、試験対策はなるべく低学年から開始した方が良いといった指導をするような、実質的なメリットに留まらない根源的な効果を含んだ文脈である。

またその過程においては、チャペルという存在も見逃せない。教育施設のなかにチャペルがあることは、祈りの場として、聖職者からそうした言葉を直接受ける機会があることを意味し、同時に神との対話、すなわち自己との対話を行う場所が教育の場に保障されていることを意味している。迷い、悩み、戸惑い、苦しみ、悲しみ… 人格形成における段階で様々な発生する学生の想いや状態を受け止め、応えてくれる存在、それが教育施設に置かれたチャペルの大きな役割のひとつであるとも言え、そのような反芻作用を行うことが可能な場として、チャペルという存在は注目に値す

る。もちろん何かを祈ったりものを考えたり、神や自己と対話する行為自体は、チャペルでなくとも可能ではある。しかし重要なのは、学生たちが生きることの関わる言語的刺激を受けたり、自己と対話をしながら、自分の頭でものを考え、深めていく過程を後押しするそうした場が、教育施設のなかに必要不可欠なものとして位置付けられているかどうか、である。これは学生の精神的な安定と自己を深めていく過程に大きな影響を持つものであり、キャリア教育とキリスト教教育の関連性を考えるうえでは欠くことのできない要素であると筆者は考える。

4. 「ロールモデル」という外発的な動機付け

次に考えられるのは、「ロールモデル」の重要性である。人は、「現実の自己」の自分に対して、「理想や目標とする自己」を持っており、その双方にあるズレを微調整しながら生きていると言っても過言ではない。そしてその理想や目標に近づきたいという意識を持ち努力することで、現実の自分が理想の自分に近づく可能性があり、またそれが達成されることで、人生における満足感や自己肯定感を持つことができる。

学習心理学の分野では、そのような自己の向上を支えるための学習の習慣付けができていない者に対しては、外発的な動機付けから始め、次第に自分自身による内発的な動機付けができるように発達していくことが望ましいとされている。その外発的な動機付けのひとつとなるのが、「ロールモデル」である。例えば憧れの人や目指したいと思う人物の事例である。ビジネスマン、スポーツ選手、芸術家、歴史上の人物あるいは身近にいる目標となるような人物などがそれである。

「モデリング」、「社会的認知理論」や「自己効力感」を明らかにしたカナダの心理学者アルバート・バンデューラ (Albert Bandura) は、「人々が示す大部分の行動は、見本の影響力を通して慎重に学ばれたり、また時には不用意に学ばれるものであって、行動の新しい型が社会的手掛かりによってのみ伝達される時、モデリングは学習の不可欠の一側面となる」と

述べ、それは他の方法によって新しい反応パターンを作り出すことができる場合でさえも、適当なモデルを与えるならば、それを獲得する過程はかなり短縮され、それゆえに大部分の場合に、良い見本は指導者のいない行動結果よりはるかに優れた教師となることを指摘している。そして、「人々は、自分たちが熱望するような能力を持つ熟練したモデルを探すものである。行動や思考の表出を通して、有能なモデルは、知識を与え、環境からの要求を管理するための効果的な技術や方略を観察者に教える。より良い方法を身に付けることは自己効力感を上昇させる。何度も進路を阻む障害物に忍耐強く対処しているモデルが示す、何事にもひるまない姿勢は、モデルによって示された技術以上のものを、観察者に与えることができる」(Bandura, 1997, p.4) とその効果を強調している。

学習の過程において、行動の手掛かりとなる「ロールモデル」を持つことがいかに重要であるかについては、これ以外にも様々な説明がなされるが、キリスト教の文脈では下記のようなものがある。

先に紹介した関田は、同講演の中で、「希望を具体的に生きているモデルを持つことが大事だと思うのです。モデルを持つ。希望の信仰を生きているモデル。(略) 福音書にあるイエス様を読みながら希望を持つということはもちろんできるのだけれども、もっと身近なところで目に見える形で、希望を生きている人のモデルに接するということは、とても我々の信仰生活の力になります。あの人のような生き方をしてみたい、ということなのです」と述べている。

この講演でとりわけ興味深いのは、キリスト教の示す「希望」が一般的な意味での望みや願いではないという点である。その部分を紹介すると、関田は「キリストそのものは、十字架を突き抜けての復活に至られた。その全存在が希望であります。イエス様は「にもかかわらず」の希望を生きた方です。十字架の道を歩み続け、神の根源的な救いをもたらすために、自らを十字架につけられた。そこには「にもかかわらず」の信仰が、希望があったと思います」と述べている。

ここでいう「にもかかわらず」というのは、例えば困難や苦境、危機、行き詰まり、あるいは弱さや辛さといった様々な「マイナス要因」を意味している。人生において起こり得る、あるいは避けがたい種々の「マイナス要因」に対し、「にもかかわらず希望を持って生きよ」というのがキリスト教におけるメッセージであり、そうした状況に対しても、折れずに力強く立ち向かって生きている身近なロールモデルを持つことで、人生を主体的に生きることができることを説いているのである。

バンデュラのいう「何度も進路を阻む障害物に忍耐強く対処しているモデルが示す、何事にもひるまない姿勢は、モデルによって示された技術以上のものを、観察者に与えることができる」というロールモデルの重要性は、キリスト教の文脈から読み直すことで、より一層力強い意義を与えることができると筆者は考える。

5. 「隣人愛」という教え

先に紹介した通り、現在の大学でのキャリア教育に関しては、「自分中心のキャリア観」が見られ、人間性や内面重視という視座が必要という指摘があり、それゆえにキャリア教育には、自己中心性を脱した人間性・内面の重視が必要であり、「他者」や「社会との共生」といった市民社会的思想の導入という大きな課題が見出される状況にある。

日本基督教団教育委員会は、1971年に「恵みによって生きる」を主題とする「総合制カリキュラム」（神の民カリキュラム）を設定し、ここではキリスト教教育の目標を、次のように示している。「教会教育（キリスト教教育）の目標は、神から委託された業として教会が人びとを、キリスト者の交わりへと招き入れ、彼らがイエスを主と告白し、生活の全領域で隣人とともに生きるものとなるように育てることである。この働きによって人びとは、主イエス・キリストに出会い、神の恵みを知り、感謝をもって主に服従し、この世における神のみ業に参与する者として、生涯にわたって成長しつづけるのである」。

ここで重視したいのは「隣人」とは何かという問いである。新約聖書にも、「最も重要な掟」は何かと問う律法の専門家に対し、イエスが「神を愛す」ことの他に、「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイ 22 章・35-39 節）と答えたとするくだりが紹介されている。ここで言う「隣人」とは一体誰を指すものであろうか。「隣人」という言葉は、聖書の中でも様々に取り上げられ、その解釈や説明方法も多種多様であるが、本論では、これに呼応する形で紹介されているルカによる福音書の「善いサマリア人」（ルカ 10 章・25-37 節）を手掛かりに論を進めたい。

「隣人を自分のように愛する」とはどういうことか。ルカによる福音書では、イエスから「隣人を自分のように愛しなさい」と言われて、律法の専門家は「わたしの隣人とはだれですか」と尋ねたとされる。それに対してイエスは、「善いサマリア人」について語り、追いはぎに襲われて、裸にされ、傷ついて、半殺しにされた人を見て、祭司やレビ人は見て見ぬふりをしてそこを通り過ぎたが、サマリア人は親切に介護したという話をし、「この三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と問い、「行って、あなたも同じようにしなさい」と律法の専門家を諭したという。この話で重要とされるのは、半殺しにされている人に「憐れみを施す」、ということではなく、「隣人になる」ということである。すなわちイエスが説いているのは、「相手の立場に自分の身を置く」という点である。

この点について飯沼（1975, p.42）は、『慈悲深いおこない』というのは、そのとき隣の人が切実に求めているものを与えるということだが、その場合、犯しやすい過ちは、隣人が最も切実に求めているものを与えていると自分では思いながら、実は、自分自身が最も切実に求めているものを、隣人に押し付けてしまうことである。つまり、『隣人になる』ということをして忘れてしまうことである。（略）自分が求めているものと、隣人が求めているものとが一致するなら、もちろん問題はないが、それが一致するという保障はどこにもない。もし一致しないなら、隣人にとってこれほど迷惑

なことはない」と述べている。同様の指摘として、菅（1967, p.15）も、「イエスの話を聞いているうちに律法の専門家はいつの間にか、自分自身は愛の行為をする人でなくて、自分自身が愛の行為を受ける人の立場に置かれている」と述べる。つまりルカの福音書が紹介するこの「隣人になる」とは、「他者の立場に立つ」ことを示している。従って、先の日本基督教団教育委員会（1971）の目標とは、「生活の全領域で隣人とともに生きる」すなわち「生活の全領域で他者の立場に立つ」ものとなるように育てることで、「この社会に参加する者として、生涯にわたって成長しつづける」と解釈することができる。

これに対して船本（1980, p.97）は、キリスト教教育の使命と課題を次のように述べている。「キリスト教教育は、人間の成長や発達の過程の中で、その人間の生の根拠と意味を問うという重大な使命を担っているのである。それは近代に見られる人間の理性や技術や科学を手放して賛美する人間楽観主義、あるいは人間至上主義に立つのではなく、ひとりの人間を真実に問題とし、個なる人間の魂の葛藤、すなわち人間の罪と弱さを真実に問題にする教育であらねばならない。その意味でキリスト教教育は、現代の知識偏重、学歴社会、人間至上主義といった風潮に対して疑問を提示する教育であると言える」。

つまり船本によれば、キリスト教が示す「隣人愛」を元にした教育、それは換言すれば、「他者の立場に立って社会に参画し、社会の実情を意識したうえで、自己中心性を脱した人間性や内面を重視した人格形成、『生きる力』につながる全人的な教育」そのものであり、そこにこそ現状で求められるキャリア教育の課題を解決する糸口として、大きな可能性を見出すことができるのではないかと筆者は考える。

6. 「奉仕」とサービス・ラーニング

最後にもうひとつ、触れておきたいのがサービス・ラーニング（SL: Service Learning）である。

日本での SL について文部科学省は、「教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム」と説明している（文部科学省，2012）。

もともと SL はアメリカを発祥のひとつとする教育手法で、若者が地域において社会的な活動を展開し、それによって民主主義や自らの社会参画についての自覚を促すものとして広がり、アメリカ各地で行われるようになったのは、1990 年代に入ってからとされている。

ここで取り上げたいのは、この「service」についてである。この語は、日本語では「奉仕」と訳されるが、「service：奉仕」はキリスト教の文脈でも重視される言葉である。キリスト教大事典によれば、「奉仕」とは、「キリストは自身の使命が仕えられることなく、仕えることにあること」を明らかにしている（マルコによる福音書 10 章・42 節）。そしてキリスト教徒は「このキリストに仕えられているがゆえに、キリストに仕え、隣人に仕えることをその生活の規範とする。キリストへの奉仕の具体的表現は、礼拝であり、隣人への奉仕は精神的または肉体的な窮乏に苦しむ者を助けることである。後者の意味での奉仕には、教会内の会員相互における奉仕と、教会外の世界への奉仕とがある」と示されている。

こうしたキリスト教と SL の関連については、唐木（2010, p.22）が、「service」の意味をラテン語以外に聖書に求めた場合、「自分がされたいように相手にも行え」という聖句に求める考え方もあることを紹介している。それは内容的には、ラテン語も聖書もどちらの語源を参考にしようとも、「社会や他者のために尽くすこと」とほぼ同じになるが、キリスト教的な哲学観に基づいて「サービス」を解釈する際には、キリスト教国家であるアメリカでは「サービス」は特別な意味を持つために、その理解においては特に慎重になる必要があるとしている。なぜなら、キリスト教の文脈では「サービス」を「神に仕える」という意味で「礼拝」と理解し、そ

れを神聖なものとして取り扱うのが一般的かつ伝統的となっているのだという。そのうえで、アメリカ社会で「サービス」の意味を考えるためには精神科医であるコールズ（Robert Coles）の説明が多くの示唆を与えると語る。

コールズによれば、「サービス」とは、「他人のために、ひいては自分自身のためになされるもの」ととらえ、それが知的反省という自らを深く振り返る認識活動と結びつくことで、自らを成長させる道具として役立つとする。つまり彼の示唆によれば、『サービス』を通して自分自身に向けられる深い内省であり、『サービス』への関与においては、そこから得られる満足や、耐え忍ばなければならない危険も含めて、すべてその人の人生の一部になる。人を『サービス』へと導く内なる声は、人生の新しい章への叫び声である。成功や失敗を伴う人生の第一話、すなわちその時点までに書かれた章は、きっと将来起こる出来事にも影響を及ぼす」とコールズは述べている（Coles, 1996, p.216）。このことから、「サービス」に関与した人々の多くは、その道徳的なエネルギーをより広い社会において役立てようとする傾向があり、そしてそのように「サービス」の視野を広げ、地域や国家における問題を解決していくことが、最終的には個人の生活圏である地域社会、さらには国家の持続可能な発展と創造的発展につながるということであろう。

つまりSLは、アメリカにおいては根源的にキリスト教とも深い関りを持ち、「社会や他者のために尽くす活動を通して、知的反省という自らを深く振り返る認識活動と結びつくことで、自らを成長させる道具」となる。それはやがて若者が社会へ出た後、そのすべてがその人間の人生の一部となって人生に大きな影響を及ぼすのである。そしてそのような活動を社会に役立てようとするとき、そこには健全な社会、ひいては民主主義の発展を見ることができるといっているのである。

現在の日本のキャリア教育の課題である「他者の立場に立って社会に参画し、社会の実情を意識したうえで、自己中心性を脱した人間性や内面を

重視した人格形成、「生きる力」につながる全人的な教育」という観点から考えても、こうしたキリスト教の文脈を踏まえた SL の持つ有用性は大きな注目に値する。近年、本学も含めて日本でも SL が取り入れられるようになってきたが、その実践にあたっては、コールズが指摘するように、「自らを成長させる道具」としての人生全般にわたるキャリア発達の側面を十分に認識しつつ、一方で「社会と連動した市民としての当事者性」をどのように構築するかについてが、重要なポイントである。同時に、学生が教室を離れた実践の場で社会の実際の姿を痛感し、それを言語化しながら学びを構築していく SL の取り組みは、社会の変化が激しい現代においてはまさに必須の教育方法として、より一層の定着と活用が期待される。

おわりに

これまで見てきたように、現在の大学教育においては、キャリア教育に関して多方面からの取り組みがなされているが、全体として、人間性や内面を重視した人格形成、「生きる力」につながる全人的な教育が不足していることが課題として浮かび上がってくる。そうした事態に対して、「自分中心のキャリア観」ではなく、「他者」、「自然」、「社会的共生」といった市民社会的思想への配慮を伴いながら、人間性や内面を重視した人格形成、「生きる力」につながる全人的な教育をキャリア教育のなかでどのように再構築していくか、その糸口のひとつとして、キャリア教育とキリスト教教育との関連について、いくつかの検討を試みるのが本論の目的であった。

そこから見えてきたものとして、まずは「ことば」を持つことの重要性であった。キリスト教教育においては、全ての物事の始まりは「言葉」であり、その「言葉」のなかに個々の人生が規定され、位置付けられている。また日々生じる出来事や経験を自己のなかに意味のあるものとして取り込んでいけるかどうかの基盤をなすものもまた「言葉」である。そうした根源的な意味も含めて、「言葉」を大事に適切に使うことのできる人材を育

成することこそが、現代社会を「生きる」うえで重要であり、あらゆる事柄を言語化しようとしてきた宗教であるキリスト教の教育には、まずもってそこに大きな役割があると考えられる。そして、人格の形成途上にある学生たちがキリスト教教育における『対話』によって「生きる」ことに関わる言語的刺激を受け、それによって「生きる」ことや存在に関する「意味」が発見され、強化されることも重要な要素である。また自己と対話したり、自分の頭でものを考え、深めていく過程を後押しするチャペルという場が、教育施設のなかに必要不可欠なものとして位置付けられていることの重要性も語られるべきである。さらには学習の過程において、行動の手掛かりとなる「ロールモデル」を持つことの大切さである。キリスト教の文脈では人生において起こり得る、あるいは避けがたい種々の「マイナス要因」に対しても、折れずに力強く立ち向かい希望を主体的に生きている身近な「ロールモデル」を持つことが、人生において大きな力となることが示唆されている。加えて聖書が示す「隣人愛」についても、キャリア教育との関係においては極めて親和性がある。つまりそれは、「他者の立場に立つ」ことに他ならず、その視点を持って「この社会に参加する者として、生涯にわたって成長しつづける」ことであり、それはキャリア教育のみならず、そもそも現在の民主主義教育をも支えるための極めて普遍性をもった要素であることが分かる。また「サービス」という言葉から教育を考えた場合には、それは単なる「奉仕」ではなく、「社会や他者のために尽くすこと」であり、それを語源とするサービス・ラーニングは、「社会や他者のために尽くす活動を通して、知的反省という自らを深く振り返る認識活動と結びつくことで、自らを成長させる道具」であるという教育における有用性を、改めて浮かび上がらせることができる。

キャリア教育とキリスト教の関連性について述べた数少ない研究のひとつとして、才藤（2007, p.122）は、「キャリア教育と精神性についての試論」で、聖書に見られる勤労観と召命観についての考察を行い、そこでは聖書が描き出す勤労観から学ぶことができる点として、二つの点を提起してい

る。まずは「働くこと」を私たちの人生を豊かにすることがらとして自分の生活や人生に統合し、そこに生き甲斐を見出すように、若い人たちを教育していく必要があるという点。もう一つは、イエスが「隣人のために」生きる新しい生き方へと私たちを招かれた点を挙げている。「イエスは私たちに、その日与えられた日々の糧に感謝し、この世の不正義と闘い、この世を改善し、自分だけのためではなく、神のため、他者のため、共同体を良くするために人々と協力して働くようにと教えられる」ことを紹介している。

つまり、キリスト教の勤労観の根源は、社会全体に向けた他者との協働であって、個を重視する現代の勤労観のなかで、この考え方は労働の意義を改めて見つめ直す大事な指摘である。このように、キリスト教との関連を示す才藤の研究においても、現代のキャリア教育の課題に対して、キリスト教そのものが持ち得る示唆の大きさを、改めて読み取ることができる。

社会が大きく変化し、それに伴って大学教育におけるキャリア教育も様々な課題が指摘される現在、キリスト教教育に改めて焦点を当てて考えてみれば、言及されることこそ少ないが、そこには現在の学生にとって課題とされる種々の問題や過不足を補って余りある根源的で豊かな考え方や可能性があることに気付かされる。それは何よりも「生きること」に軸足を置いたキリスト教教育だからこそその可能性であり、第一に「ことば」を通して社会と対話しようとするキリスト教教育だからこそ担うべき使命のようにも思える。

今回は試論としての一考察であるが、キリスト教という宇宙の大海には、現代のキャリア教育を語るうえで重要とされる教訓や方法論を、数多く見出すことができるであろう。今後、キャリア教育とキリスト教教育との関連性や親和性、その可能性をより一層明確にしていくことは、大きな課題である。さらに、「人生百年時代」と言われる長い人生を生きていく学生のより良い成長を願い、彼らを豊かな市民社会を構築するに相応しい見識と人格を持った人間として社会に送り出すキャリア教育の方法を検討する

こともまた、残された課題である。

引用文献

Benesse 教育研究開発センター (2010) 「キャリア教育・就職支援の現状と課題に関する調査 (2010 年)」

http://berd.benesse.jp/up_images/research/old/kyaria_syusyoku/2010/pdf/data_all.pdf (2017.12.23 取得)

独立行政法人日本学生支援機構 (2017) 「大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (平成 27 年度)」

http://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/__icsFiles/afieldfile/2017/02/14/h27torikumi_chosa.pdf (2017.12.23 取得)

江利川良枝 (2017) 「大学における初年次のキャリア教育—大学生の発達課題とアイデンティティ形成に着目して—」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第 53 巻 4 号 pp.231-244

藤澤伸介 (2011) 『言語力 認知と意味の心理学』新曜社

船本弘毅 (1980) 「キリスト教教育の課題」『キリスト教学研究Ⅳ「論攷」』第 46 号 関西学院大学 pp.83-100

堀真由美 (2016) 「キャリア教育の現状と課題」『白鷗大学論集』第 31 巻 pp.27-42

飯沼二郎 (1975) 『イエスの言葉による行動のための手引き』日本基督教団出版局

唐木清使 (2010) 『アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング』東信堂

児見川孝一郎 (2007) 『権利としてのキャリア教育』明石書店

文部科学省「今後の初等中等教育と高等教育の接続の改善について (答申)」1999 中央教育審議会 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/05010502/001.htm (2017.12.23 取得)

文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議

- 報告書～児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために～」
2004 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801.htm (2017.12.23 取得)
- 文部科学省「学士課程教育の構築に向けて（答申）」2008 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf (2017.12.23 取得)
- 文部科学省「大学設置基準及び短期大学設置基準の改正について（諮問）」
2011 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1289824.htm (2017.12.23 取得)
- 文部科学省「これからの大学教育等の在り方について（教育再生実行会議第三次提言）」2013 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/_icsFiles/afieldfile/2013/10/16/1340415-9-1.pdf (2017.12.23 取得)
- 文部科学省「新たな未来を築くための 大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」答申 2012
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (2017.12.23 取得)
- 日本基督教協議会文書事業部キリスト教大事典編集委員会（1985）『キリスト教大事典』改訂新版第8版 教文館
- 日本聖書協会（1992）『新共同訳聖書』
- 才藤千津子（2007）「キャリア教育と精神性についての試論：聖書にみられる勤労観・召命観」『新島学園短期大学紀要』第27号 pp.109-124
- 坂口順治（1997）「JICE のキリスト教教育」『キリスト教教育研究』第15号
立教大学キリスト教教育研究所 pp.1-19
- 関田寛雄（2015）『み言葉をたずさえて歩む－キリストの福音に立つ生き方』第6回「信徒・教役者の集い」講演録 日本聖公会北関東教区
- 菅円吉（1967）「聖書講和」『JICE シリーズNo.2 慰安系の神学』立教大学キリスト教教育研究所 pp.14-15

山岡三子 (2012) 「キャリア教育をととした社会デザインという可能性 : 「生」のリメディアル教育として」『立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究』第 11 号 pp.245-253

Albert Bandura (1997) *Self-Efficacy in Changing Societies*, Cambridge University Press / 訳者: 本明寛・野口京子・春木豊・山本多喜司 (1997) 『激動社会の中の自己効力』金子書房

Robert Coles (1993) *The Call of Service: A Witness to Idealism*, G K Hall & Co. / 訳者: 池田比佐子 (1996) 『ボランティアという生き方』朝日新聞社

(立教大学サービスラーニングセンター (RSL) 助教)